

聖書学論集 43

抜刷

---

2011年4月  
日本聖書学研究所発行

# パウロの個人宛書簡\*

— 偽名文書としての牧会書簡の戦略 —

辻 学

## 1 問題設定：なぜテモテとテトスへの個人宛書簡なのか？

牧会書簡<sup>1)</sup>は、「パウロ書簡」の新しい型である。すなわちパウロが同労者に送った個人宛書簡の体裁をとっている。この型の手紙は、真正パウロ書簡に並行例がない<sup>2)</sup>。牧会書簡の著者は、古代ギリシア・ローマにおいて知られていた個人宛書簡の類型<sup>3)</sup>を初めてパウロ書簡の伝統に導入したのである。

さらに牧会書簡に特徴的なのは、複数の書簡、すなわち3通からなる集成(Corpus)という姿をしていることである。この特徴は、とくに他の第二パウロ書簡と比較したときに際立っている。

この特徴は、牧会書簡の偽名性に反対する論拠とされてきた。すなわち、偽名文書という前提の下ではその意図が説明しにくい。なぜなら、すでにFrederik Torm (1932年)が述べているように、「個別の人間に宛てるという全く新しい形式を選んだこと自体〔……〕同時代の人々には非常に奇妙なことだったはずで、著者にとっては、これらの書簡を認めてもらうのに支障をきたすだけだっただろう<sup>4)</sup>」というのである。

だが、なぜ教会宛書簡ではなく個人宛書簡なのかという問いは、真筆性を主張する立場に対しても向けられる。そしてこの場合は、なぜパウロがエフェソとクレタの教会に直接書き送らなかったのかということの説明がさらに難しい。明らかに著者は何らかの意図を持って、史的パウロであれば教会

に直接送ったであろう内容の手紙を個人宛書簡として形作ったのである。

形式的観点から言えば牧会書簡は、本物の個人宛書簡であり、特定の状況に根差している（Ⅰテモ 1:3; Ⅱテモ 4:9-15,21; テト 1:5 参照）。それにもかかわらず手紙の中では、とりわけⅠテモテ書とテトス書の場合、発信人と受取人との間の個人的な関心事のみならず、教会共同体に対する指示がなされている<sup>5)</sup>。手紙の最も重要な内容である、教会秩序（例、Ⅰテモ 2:8-15; 3:1-13; 5:3-15,17-25; テト 1:5-9; 2:1-10。ディダケー 15:1-2; Ⅰクレメンツ 44:1-6; ポリュカルポス 5:2-3 参照）や、異なる教えとの対決（Ⅰテモ 1:3-7,18-20; 4:1-11; Ⅱテモ 3:1-9; テト 1:10-16; 3:9-11 ほか。ディダケー 11:1-2; 16:3-4 参照）は、個人宛書簡よりもむしろ教会宛書簡の類型により適合するはずである。

さらに奇妙なのは、「パウロ」が、自分の一時的な不在を預かる（Ⅰテモ 1:3; 3:14 [パウロは、テモテのもとにすぐ戻れると考えている])、あるいは自分のし残したことを仕上げる（テト 1:5; 3:12 [テトスは急いでニコポリスのパウロのもとへ赴かねばならない]) だけの暫定的な代理人に、非常に詳細な指示を与えていることである。これも、手紙の外的設定と中身の不一致を示している。

Ⅱテモテ書の本論部分、とくに 2:14-3:9 には、他の 2 通でも扱われている主題が現れる——（真理／信仰から）迷い出た人々に関する警告（Ⅱテモ 1:18// Ⅰテモ 1:4; 6:21; テト 1:10-16）、偽教師に関する警告（Ⅱテモ 4:3// Ⅰテモ 1:3,8; 6:3）、女性の問題ある振舞い（Ⅱテモ 3:6-7// Ⅰテモ 2:12; 5:11-15)<sup>6)</sup>。ここから、Ⅱテモテ書も単なる個人的なやり取りではなく、Ⅰテモテ書やテトス書で語られている、教会全体に関わる事柄を問題にしていることがわかる。

以上の観察から、個人宛書簡という類型は牧会書簡にとって本質的なものではないと結論することができる。手紙の内容からすれば、教会宛書簡の方がその枠としてはより相応しい。ではなぜ著者は、それにもかかわらず手紙を個人的な通信の形にしたのだろうか。これが我々の第 1 の問いである。

第 2 の点、すなわち手紙が 3 通であるということについては、やはりまず「パウロ書簡集」(Corpus Paulinum) との結びつきを考えるべきであろう。Peter Trummer が、牧会書簡の成立を「従来の〔パウロ〕書簡集の新版という流れの中で」<sup>7)</sup> 把握しているのは正しい。だが、そこで問われるべきは、その「新版」の中で牧会書簡がどのような機能を担うのかということである。さらにまた、なぜ「牧会書簡集」(Corpus Pastorale) がテモテ宛に 2 通、テトス宛に 1 通という構成になっているのかということもこの関連で説明する必要がある。

以下ではこれらの問いに取り組むことにし、まずは個人宛書簡という類型の問題 (2)、次いで 3 通からなる構成の問題 (3) を扱うことにしたい。

## 2 個人宛書簡と真贋批判

### 2.1 背景としての真贋批判

なぜこの偽名書簡の著者は、史的パウロであればおそらく教会宛書簡によって知らせたであろう事柄を伝えるのに、個人宛書簡という類型を用いたのだろうか。これが最初の問いである。

我々のテーゼは、読者による真贋批判を著者が考慮したから、というものである。すなわち著者は、この書簡類型を用いることで、自らの文書が偽作であることの露呈を避けようとしたのである。

Armin Daniel Baum は、偽名文書を受容史を分析し、初期キリスト教においては、非キリスト教的古代におけるのと同様、文献偽造はその内容の如何に関わらず否定的に評価されたということを説得的に示している<sup>8)</sup>。このことは、Wolfgang Speyer の詳細な研究以来確立している、新約諸文書の世界ではすでに「知的財産」の概念<sup>9)</sup>、そして（それと共に）真贋批判<sup>10)</sup> が存在したという事実によって支持される。真贋批判は、文献偽造に対する否定的態度を前提している。

この見方を裏づけてくれる、よく知られたエピソードがある。紀元2世紀、小アジアのある長老が、パウロ行伝を偽作したかどで、その教会職務を解任されたのだが、その長老は「パウロへの愛から」(amore Pauli) この偽作を行なったという<sup>11)</sup>。良い意図からなしたことであったにも拘らず、偽作という事実がこの人物から職務を奪うことになった<sup>12)</sup>。ここから見て取れるのは、文献偽造は、どのような動機からのものであれ、原則として拒絶されたということである<sup>13)</sup>。

真贋批判がとりわけ重要な役割を果たすのは、神学的見解の相違からくる争いが偽作の動機となっている場合である。というのもこの場合には、どの見解が偉大なる過去に遡り得るのが争われるからである。これはまさに、第二パウロ書簡のケースでもある。第二パウロ書簡は、「誤った教え」に対して自分たち自身の立場を「正しい」パウロ主義として、パウロの口に置こうとしているからである<sup>14)</sup>。

この文学史的背景を考慮すれば、自らの立場を文献偽造によって正当化しようとする著者がその文献を、疑いなく真筆の文書として受け入れられるように形作らねばならなかったことは十分に考えられる。その点で、牧会書簡の著者もまた例外ではなかったのである<sup>15)</sup>。

## 2.2 文書の成立事情=最重要の判断基準

では、牧会書簡の著者が、自ら記したこれらの文書を真正のものと信じさせるためには、何に注意する必要があったらうか。

古代キリスト教における文書の真贋批判は、次のような観点からなされている。(1) 文体/語彙、(2) 内容、(3) 文書の成立事情、(4) 当該文書についての外的証言の有無<sup>16)</sup>。

たとえばエウセビオスは、キリスト教の書物を、「認められた」(ὁμολογούμενα) 文書、「疑わしい」(ἀντιλεγόμενα) 文書、「偽書」

(υόθα) に区分しているが、その際次のような論拠を挙げている——「代々の教会著作家にはその著作で、これらの文書 [=偽書] に言及するのを正しいと考えた者は一人もいなかった。事実、それらの文体は使徒たちのものとは異なり、教義や内容の傾向も真の正統的見解とかけ離れていて、それらが異端者の手になるでっち上げであることををはっきりと示している」(『教会史』III 25.6-7)<sup>17)</sup>。さらに別の箇所でもエウセビオスは、ピラト行伝の真正性を、年代に関するデータが間違っていることを根拠にして否定している(『教会史』I 9.3-4)。

真贋批判のどの基準が、「パウロ」の個人宛書簡を新たに作り出す際に特に重視されただろうか。個人宛書簡は、差出人と受取人との間に、教会宛書簡とは別種の間接関係を前提するゆえ、牧会書簡の著者はとりわけ成立事情が吟味されることに気を配った蓋然性が高い。

牧会書簡の著者はもちろん、真正パウロ書簡のスタイルや内容を真似る、ということも疎かにはしていない<sup>18)</sup>。だが、それらを正確に、狂いなく継承するというところに大きな価値を置いてはいないようである。著者の考えでは、真正性の装いは、文体や言語の独自性、また神学的な独自性によっては損なわれないのであり、この点では他の第二パウロ書簡の著者たちと異なるところはない。

それに対して、牧会書簡の著者にとっても、また他の第二パウロ書簡の著者たちにとっても、真剣に取り組むべき課題は、信憑性のある成立事情を作り出すことだったに違いない。手紙の前提する執筆状況を、パウロの伝記<sup>19)</sup>に矛盾なく組み入れることができないと、偽作の疑いを招くことになるのである。

もしこの想定が正しければ、矛盾のない成立事情を作り出すという努力は、牧会書簡だけではなく、第二パウロ書簡全てに共通してなされているはずである。そこでまず、牧会書簡に向かう前に、第二パウロの教会宛書簡を作った著者たちがどのようにして架空の成立事情を組み立てているのかを一

瞥しておくことにしよう。

### 2.3 第二パウロ教会宛書簡が描く架空の状況

我々の想定では、第二パウロ書簡の著者たちにとっては何よりも、手紙の状況をうまくパウロの伝記に組み入れることが重要なはずである。この目的のために第二パウロの著者たちは、ある共通した手法に訴えている。すなわち、曖昧な状況設定を行うということである。著者たちはそれぞれの仕方、執筆状況を不鮮明なままに置いている。そうすることで、徹底した真贋批判の実践を不可能にしているのである。

#### 2.3.1 コロサイ書

コロサイ書では、不明瞭な状況設定というこの手法が、著作状況と受取人の状況の双方について見て取れる。

コロサイ書の著者はこの手紙を、パウロが獄中にあるという状況に結びつけているが、これはフィレモン書から取り入れたものである<sup>20)</sup>。この執筆状況は、偽作にとって非常に便利であった。なぜなら、パウロが投獄中にフィリピ書とフィレモン書以外にも他に、これまで知られていなかった手紙を書いていた、という想像は矛盾を生じないからである。偽作書簡の著者にとってさらに都合が良かったのは、パウロが何度も投獄されていたという事実である(Ⅱコリ 11:23)。手紙の状況を確認しようとしても、いつどこで「パウロ」がこれら「獄中書簡」を書いたのかを同定するのが非常に難しい。

これと結びついているのが、受取人の特徴づけである。コロサイ書は、パウロがまだ訪れたことのない教会へ宛てられたことになっている(コロ 1:7; 2:1)。こうして著者は、パウロの宣教活動の枠内に、これまで知られていなかった新しい執筆状況を位置づけようとしているのである。

さらに、コロサイの町が架空の宛先として選ばれたのは、この手紙がパウロの生前に本当に宛先教会へ届き、読まれたのかどうかを最早確かめる術がなかったからではないかと思われる。紀元 61 年に起こった地震が、ラオ

ディキアおよびヒエラポリス共々、おそらくコロサイをも破壊してしまった<sup>21)</sup>。この事実は、擬似パウロ書簡の執筆とうまく合うのではないだろうか。コロサイの町が地震の後に再建されたかどうかに関わりなく、地震による破壊のせいで、それ以前の教会の状況が不明瞭になってしまい、コロサイ書が偽物であると露呈する危険は小さくなったに違いない<sup>22)</sup>。こうして著者は、パウロが本当にこの手紙を書いたのか、もしそうなら、いつどこで書いたのか、という検証を困難なものにしたのである。

#### 2.3.2 エフェソ書

エフェソ書の宛名(1:1)については多くの議論があるが、元来 τοῖς οὖσιν の後には地名はなかったと考えるべきであろう。ἐν Ἐφέσῳ (あるいは、マルキオン<sup>23)</sup>によればラオディキア)を二次的に削除するということは全く考えられない。納得のいく理由が見つからないからである<sup>24)</sup>。

しかし他方、エフェソ書が「公同」の、すなわち全キリスト者に宛てた手紙の体裁をとっているというのもありそうにない。フィクションの水準ではあるが、手紙は差出人(パウロ)と受取人との間に親密な関係があることを前提している(エフェ 3:3; 6:21-22)。ここからして、宛名が特定されていないのは、手紙の内容が普遍性を持っていることを示すもの、という見方は疑わしい。

エフェソ書の宛名(τοῖς ἁγίοις τοῖς οὖσιν)は、ローマ書(1:7)やⅡコリント書(1:1)、またフィリピ書(1:1)のそれを思い起こさせる。これらのパウロ書簡を知っている読者であれば、τοῖς ἁγίοις τοῖς οὖσιν の後に地名が来ることを予想するはずであり、実際に ἐν Ἐφέσῳ という補足をした筆耕がいたわけである。私見では、エフェソ書の著者は、この「空所」から生じる間テクスト的效果を計算して、宛名をわざと不完全に置き、いかにも地名が二次的に落ちたかのように装った<sup>25)</sup>。その結果、この手紙が元来どこに宛てられていたのかはわからないままになった。これもまた、不明瞭な状況設定という手法の一つである。

### 2.3.3 IIテサロニケ書

IIテサロニケ書<sup>26)</sup>においても、同種の手法が見て取れる。IIテサロニケ書とIテサロニケ書の関係はいまでもって議論が尽きない。文献依存があることには疑いの余地がない一方、IIテサ2:2のδι' ἐπιστολῆς ὡς δι' ἡμῶνがIテサロニケ書を指すのかどうか、指しているとすれば、どういう意味で指しているのかについては意見の一致を見ない<sup>27)</sup>。

ギリシア語本文は、「我々の（作ないし書いた<sup>28)</sup>）ものだと——自称ないし偽って——される手紙によって」とも訳せるし、また「(実際に) 我々の（作ないし書いた）ものである」とも訳せる<sup>29)</sup>。この曖昧さはおそらく、Iテサロニケ書とIIテサロニケ書との関係を意識的にオープンにしておきたいという著者の意図によるものであろう<sup>30)</sup>。IIテサロニケ書の中に、Iテサロニケ書への明確な言及が何ら見られないという事実は、この想定を支持する<sup>31)</sup>。

IIテサ2:2は暗にIテサロニケ書を指し示しているが、関連づけを曖昧にすることで、ここでは別の手紙が考えられているという解釈の余地も残している。こうしてIIテサロニケ書の成立事情、とりわけIテサロニケ書との時間的距離は不明瞭なまま置かれるのである。

### 2.3.4 まとめ

コロサイ書、エフェソ書、IIテサロニケ書の著者たちは、手紙がパウロの生前に成立したのに見えるよう工夫している。その際著者たちは、手法は違えど、いずれも手紙の成立事情を詳しく描こうとはせず、むしろ不明瞭なままに置いている。これは、手紙の成立事情が、パウロの歩みと相容れないせいで偽作が露呈するという事態を避けるためであったと思われる。

## 2.4 個人的な通信——牧会書簡の偽作戦略

第二パウロの教会宛書簡に見られた、成立事情の不明瞭な描写という点で

は、個人宛書簡である牧会書簡もまた例外ではない。しかし牧会書簡の著者はさらに新しい戦略を用いた。すなわち、パウロの個人宛書簡の創作である。

成立事情を偽装するのに、個人宛書簡という類型には二つの利点がある。一つは、教会宛書簡よりも基本的に成立事情の偽装が容易だということであり、もう一つは、個人宛書簡であれば、これまでその存在が知られていなかったことが不自然でなく、したがって外的証言がない理由も説明しやすいということである。

教会宛書簡とは違って、個人宛書簡は偽作であることが露呈しにくい。とくに、差出人と受取人がすでに亡くなっていて、その手紙が偽作かどうかを証言できない、という場合はそうである。

また、個人宛の文書の場合、公には知られずにいたが、ある時突然にどこかで「現れた」ということも不思議ではない。したがって、これらの書簡についての外的証言がないことは十分に説明がつく。

1世紀末から2世紀初頭<sup>32)</sup>（あるいはもっと後？）という、パウロの死から相当隔たった時期に、他に何の外的証言もない「パウロ」の教会宛書簡をさらに作って、突然衆目に晒すことは危険だったはずである。当然ながらその書簡は、偽作の疑いを招いてしまう。そのような創作をするには、真正パウロ書簡が広く知られるようになった後では最早遅過ぎたのである<sup>33)</sup>。おそらくこの事態を顧みたと著者は、パウロの個人宛書簡という類型を創作することにしたのであろう。

だが、教会管理に関する指示を個人宛書簡という形式で与えるためには、パウロが遠くから、離れた教会の中で活動している同労者に向けて書く、という状況を構築する必要がある。次の章では、牧会書簡の著者がどのようにしてその状況を、3通の書簡について作り上げているかを見ることにしよう。

## 2.5 牧会書簡が描く（架空の）成立事情

牧会書簡、とりわけIテモテ書とテトス書の前提している執筆状況が、使

徒行伝や真正パウロ書簡から再構成されるパウロの足跡と一致しない、ということは再三指摘されてきた<sup>34)</sup>。問題は、なぜ著者がそのような描写をしたのかということである。著者はおそらく、使徒行伝を知ってはいない<sup>35)</sup>。だが少なくとも、真正パウロ書簡の示す内容を利用して真正性を装うことはできたはずである。

しかしながら、実のところ I テモテ書の執筆状況——パウロはテモテと一時的に離れ、マケドニアへ向かって旅立った (I テモ 1:3; 3:14-15) ——は、真正パウロ書簡の記述と一致していないわけではない。著者はおそらく、I コリ 16:5-11 の描写を利用して執筆状況を構成しているのであろう<sup>36)</sup> 10。I コリント書では、テモテではなくパウロがエフェソにおり (I コリ 16:8,10)、これは I テモテ書の状況とは一致しない。だが、エフェソでパウロはテモテの帰還を待っており、テモテが戻ってきたら今度は自分がマケドニア経由でコリントへ旅行しようと考えている (16:5)。だが両コリント書簡は、パウロが実際に出発したのかどうかについては黙している。牧会書簡の著者はおそらくここに、伝承の「隙間」を見出し、I テモテ書を結びつけたのであろう<sup>37)</sup>。その際、この旅行計画が達成されなかった (II コリ 1:15-16) ことは問題にならない。なぜなら、「パウロ」が正確にどこでこの手紙を書いたことになっているかは不明にされているからである (不明瞭な執筆状況! )。

テトス書の状況 (テト 1:5) は、パウロの生涯の中に位置づけるのがさらに難しい。クレタ島におけるパウロの宣教活動についても、またテトスをこの島と結びつけることについても、新約の伝承には何ら手がかりが見出されない。クレタ島における伝道活動については、想像するしかない。牧会書簡の当時に「エフェソから出発したクレタ伝道」があった<sup>38)</sup> というのは純然たる推測に過ぎない。クレタ島におけるパウロの伝道活動については全てが闇の中なのである。しかしそれは、逆に言えば、既知のパウロ像と矛盾をきたす情報ではないということでもある。そしてそれは (後述するように) おそらく著者の意図に基づいたものである。

ここから少なくとも結論できるのは、牧会書簡の著者は、I テモテ書とテトス書については、パウロの生涯の中に読者がイメージできる、しかしそれ以上詳しくはわからない状況を案出しているということである。遠く離れているパウロが、教会にいる同労者に教会管理上の指示を与えるという状況が、牧会書簡のフィクションには必要だったが、そのような状況は真正パウロ書簡の中には前提されていないため、著者はこれを、既知のパウロ像と矛盾しないように創作したのである。

I テモテ書およびテトス書とは違い、II テモテ書の示す執筆状況は極めてはっきりしている。パウロはローマで獄中にあり (II テモ 1:8,16-17)、死を目前にしている (4:6-8)。ここには明らかに、使徒行伝 28 章が示唆する、パウロの最期の時が前提されている。使徒行伝の描写との細かな相違点——パウロのトロアス滞在 (II テモ 4:13) や、この時点でテモテがエフェソにいたこと (1:18; 4:19 参照) ——は、著者が使徒行伝を知らなかったということの説明がつく (上述参照)。

したがってここでも著者は、パウロの伝記における隙間を用いている。II テモテ書は、ローマにおける投獄期間という、個別の情報が極めて少ないところに結びつけられているのである。

## 2.6 まとめ

個人宛書簡という、牧会書簡の内容にはそぐわない種類の選択は、著者が真贋批判、とりわけ文書の成立事情に関する検証に耐えるためのものと考えられる。著者にとって重要なのは、虚構の執筆状況が、パウロに関する既知の情報と矛盾している印象を読者が抱かないということであった。

第二パウロの教会宛書簡の著者たちは、手紙の成立事情を何らかの形で不明瞭にするという手法でこの課題を果たしている。それに対して牧会書簡の著者は、教会宛書簡という形式を放棄し、その代わりに個人宛書簡を創作した。この類型なら、手紙の発見が遅かったことも、差出人と受取人のやり取りがそれまで知られていなかったことも、その真正性に疑いをささむ要因と

ならないからである。

### 3 テモテとテトス宛の手紙

第二の問いに移ろう。なぜ著者は、1通でなく3通、それもテモテに2通、テトスに1通の手紙を書いたのだろうか。以下では、まず受取人としてのテモテとテトスを比較し、さらに3通の内容を相互に比較することにしよう。

#### 3.1 牧会書簡=パウロ書簡集の解釈装置

牧会書簡は、3通の個人宛書簡の集成という形を採っており、3通の成立事情は相互に無関係という体裁になっている。なぜこのような形を著者は選んだのだろうか。偽名書簡を1通作るよりもこの形の方が有利な点はどこにあるのだろうか。

冒頭で述べたように、書簡集という形態は、パウロ書簡集 (Corpus Paulinum) との結びつきを容易に想像させる<sup>39)</sup>。私見では、そこからさらに次のことが導き出せる。

(1) 文献偽造という観点から言うと、書簡集の形態は、個人宛書簡が発見された事情の理解を容易にしてくれる。3通の手紙は、相互に無関係に成立し<sup>40)</sup>、後からいわば偶然集められ、発見されたように見せかけている。この形態はパウロ書簡集と同じである。つまり、この書簡集という形によって、それまで知られていなかったパウロの個人宛書簡が日の目を見た次第が理解できるようになっているわけである。

書簡集という形態はさらに、パウロが教会宛書簡と並んで個人宛書簡も書いていたということの信憑性を高めてくれ、牧会書簡の真筆性を装うのに役立つ。この点でも牧会書簡集 (Corpus Pastorale) は、パウロ書簡集 (Corpus Paulinum) との結びつきで受容される仕掛けになっているのである。

(2) 牧会書簡集 (Corpus Pastorale) はしかし、パウロの新しい書簡集なのではなく、「長い生成過程の中にあり、これら〔牧会書簡〕によって締め括

られるパウロ書簡集 (Corpus Paulinum)」の一部なのである。牧会書簡が、Peter Trummerが言うように、パウロ書簡集の「ピリオドないし感嘆符<sup>41)</sup>」であるかどうかはさておくとしても、そうだとすれば牧会書簡集は、そのようにして拡充された「パウロ書簡集」の内部で重要な機能を持っているはずである。

牧会書簡がこのパウロ書簡集の拡充新版の中で担っている機能とは、教会宛書簡の「解釈装置」である。つまり、教会宛書簡の中にあるパウロの発言で、パウロ死後の教会の中で分裂を引き起こす原因となっていたものの「正しい」解釈を提示するのがその役目なのである。

この見方を裏づけてくれるのは、牧会書簡が一貫して、真正パウロ書簡の中にある発言に遡る主題を扱っているという事実である。例えば、律法 (Iテモ 1:6-11)、権威者・上位者への従順 (Iテモ 2:1-3; テト 3:1-2)、女性の振舞い (Iテモ 2:8-15; 5:3-16)、清浄規定 (Iテモ 4:1-5; テト 1:15)、奴隷と主人 (Iテモ 6:1-2)、復活理解 (IIテモ 2:8-13,18) がそれにあたる。つまり、これらの問題領域について著者は、「パウロ」が自分の以前の発言を敷衍する、ないしは修正さえもする、という形をとることで「最終回答」を与えようとしているのである<sup>42)</sup>。

しかし、パウロ自身が同じ主題についてなした発言を修正ないし改変することで、「本家」よりも程度の高い影響力を持とうとするならば、牧会書簡の発言が元来の文脈を超えて普遍的に妥当すると見なされる必要がある<sup>43)</sup>。だが、牧会書簡集の各書簡は、自分だけでは普遍的な妥当性を主張することができない。なぜなら、その内容が通用する範囲は、パウロとテモテないしテトスとの間の個人的な関係に限定されるからである。この点では、個人宛書簡は教会宛書簡に対して不利だと言わざるを得ない。この難点を牧会書簡の著者は、手紙を1通ではなく、3通したためることで克服しようとしたわけである。その手法を以下に見ておくことにしたい。

#### 3.2 テモテとテトス：二人の共通点と相違点



「牧会書簡集」が3通から成るといふことの背後に、上述したような著者の意図があるとしたら、テモテとテトスを宛先としていることには、重要な意味が与えられているはずである。

テモテとテトスには共通点がある。真正パウロ書簡と(テモテについては)使徒行伝からわかるように、二人はいずれもパウロと非常に近い関係にある。テモテはおそらくパウロによって回心した(使徒 16:1-3)<sup>44)</sup>。テモテのことを「私の愛する、そして主にある忠実な子供」と呼んでいる(Ⅰコリ 4:17; さらにフィレ 10 でオネシモを「私の子供」と呼んでいるのも参照)のは、おそらくその反映である。同様のことが、テトスに対する「私の同志であり同労者」という呼称(Ⅱコリ 8:23)についても言える。テトスはパウロ(およびバルナバ)と共に使徒会議のためエルサレムへと赴き、パウロによる異邦人伝道の証人となっている(ガラ 2:3)。

さらに二人は、パウロの伝道活動において共通した任務を果たしている。すなわち、パウロによって教会へと派遣され、そこでパウロの意思を説明することで、パウロと教会との関係を強化している(テモテについてはⅠテサ 3:2-3; フィリ 2:19-23; Ⅰコリ 4:17; 16:10。テトスについてはⅡコリ 2:13; 7:6-7,13-14 を参照)。つまり彼らの任務は、パウロの使信を教会へと仲介することなのである。二人の持つ意義がいかに大きかったかは、「正嫡の(γνήσιος)子」という呼びかけに現れている(Ⅰテモ 1:2; テト 1:4)。この呼びかけは、二人の正統性と卓越性を強調しており、同時に、彼らに委ねられた指示(=牧会書簡の内容)が、他の「真理から迷い出た」(Ⅱテモ 2:18)パウロ解釈に対して正統かつ卓越したものであることをも強調している(さらにⅠテモ 1:18-20; 4:1-5; Ⅱテモ 1:15; 4:14-15; テト 3:10-11 参照)。

しかしながら、テモテとテトスの間には重要な違いがあることも見落とせない。牧会書簡の著者と読者にはおそらく、テトスよりもテモテの方がずっとよく知られていたであろう。このことは、手紙の記述の仕方に反映している。すなわち、Ⅰテモテ書の執筆状況には、読者が知っている要素が用いられている一方、テトス書のそれは、ほとんど知られていない要素に満ちてい

るのである。

Ⅰテモテ書には、知られた人名や地名がより多く登場する。そもそもテモテ自身が、パウロの同労者としてはテトスよりずっと知名度が高く、真正パウロ書簡の共同発信人としてしばしば名を連ねている(Ⅰテサロニケ、Ⅱコリント、フィリピ、フィレモン。さらにⅡテサ 1:1 およびコロ 1:1 も参照)。テモテはパウロと共に伝道活動に従事しており(フィリ 2:22)、上述のように、しばしばパウロの代理人として派遣されている。したがって、パウロの伝道領域においてテモテが広く知られていたと想像することは困難ではない(ヘブ 13:23 も参照)。またエフェソも、パウロの活動場所として知られていたからこそ、ここでテモテの居場所として選ばれているのであろう(使徒 19:10; 20:31 参照)<sup>45)</sup>。

他方、テモテに比べると、テトスの知名度はおそらく低かった。確かにテトスは、パウロとコリント教会との間にあった紛争を克服する際(Ⅱコリ 7:6,13-15)、また献金蒐集の際(Ⅱコリ 8:6,16-24)に決定的な役割を担っている。使徒会議に際しては、パウロとバルナバに伴われてエルサレムへ行ってもいる(ガラ 2:1-3)。つまりテトスはパウロにとって、危機的状況における支えとなった人物なのである。しかし、真正パウロ書簡にも使徒行伝にも、テトスの足跡はそれ以上見られない。おそらくパウロの死後、テトスについてはほとんど情報がなかったであろう。それゆえ著者にとっては、テトスとパウロの手紙によるやり取りを創作することは容易であった。クレタ島での滞在というのも、パウロに関する「隠れた」報告の一つである。もはや誰も、パウロがそこに教会を設立したかどうかを確かめることはできないからである。

テトス書にはまた、パウロの同労者でありながら、他では名前が知られていない人物が見出される——アルテマス(3:12)と法学者ゼナス(3:13)である<sup>46)</sup>。このように知られていない人物名を挙げることで、テトス書では他に証言のない未知の状況が問題になっているのだという印象が強められることになる。

このように、Iテモテ書とテトス書との相違は明らかである。Iテモテ書は、パウロの伝道地として良く知られた場所にいる、良く知られたテモテに宛てられている。他方、パウロの同労者としてのテトスについても、またその活動地であるクレタについても、読者は比較的わずかな知識しか有していなかった。

この相違は私見によれば、Iテモテ書をテトス書が補い、拡充していると思えば一番うまく説明がつく。テトス書を通して著者は読者に、パウロがエフェソの教会に与えた指示(=Iテモテ書の内容)は、教会全般に当てはまる教えとして、多少の改変を加えつつ、クレタの知られざる教会にも与えられていたのだと印象づけようとしているのである。別の言い方をすれば、テモテは「牧会書簡集」(Corpus Pastorale)の「主たる受取人」であり、テトスは「第二の受取人」ということになる。

### 3.3 三通の手紙による空間的・時間的拡張

テモテとテトスのこの関係は、「牧会書簡集」内部における3通の関係に対応している。すなわち、Iテモテ書の内容の有効範囲を、テトス書が空間的に、IIテモテ書が時間的に拡張することで、「牧会書簡集」の内容は普遍妥当性を得ようとしているのである。

#### 3.3.1 Iテモテ書とテトス書：有効範囲の空間的・地理的拡張

上述したテモテとテトスの類似性は、そのままIテモテ書とテトス書の類似性に対応しており、これが有効範囲の空間的拡張に役立っている。

両書簡は、主題的にも構造的にも共通したものを持っている。どちらの手紙も、パウロの若い「継承者」(Iテモ 1:3; テト 1:5)に宛てた、教会の管理、すなわち、「教会の秩序をめぐる諸問題とその管理」(Iテモ 3:15; 5:17-22; テト 3:10-11 参照)、そしてその帰結として、指導的立場にある人々への要求を挙げること(Iテモ 3:1-7,8-13; テト 1:5,9)<sup>47)</sup>を主題としている。

書簡の構造もそれに対応している。どちらの書簡も、次の3部構成になっ

ている——(a) 誤った教えの批判(Iテモ 1:3-11; 4:1-5; 6:3-10; テト 1:10-16)、(b) 正しい教えのため闘うようにとの指示(Iテモ 1:18-20; 4:6-16; 6:11-16; テト 3:8-11)、(c) 具体的勧告(Iテモ 2:1-3:13; 5:1-25; 6:17-21; テト 2:1-10; 3:8-9)。

その際注目されるのは、テトス書がIテモテ書の短縮版であるかのような印象を与えていることである。テト 1:5-9(監督ならびに長老職の前提条件)はIテモ 3:1-13を思い起こさせるし、テト 1:14-16(ユダヤ人の作り話や掟、清い/穢れている)は、Iテモ 1:4-11および4:1-5の要約のようですらある。同様に、テト 2:1-10はIテモ 5:1-6:2bで、種々の年齢層の男女(高齢のやもめ、より若いやもめ、長老)ならびに奴隷に対する正しい接し方を説いていることと結びついている。また、テト 3:1-2はIテモ 2:1-3を想起させずには置かないであろう<sup>48)</sup>。

これは全て、Iテモテ書の内容を地理的に拡張しようとする著者の戦略と解することができる。すなわちパウロがテモテに対して命じることは、エフェソ(Iテモ 1:3)に限定されるものではないというのである。なぜならパウロは、クレタにおいて活動しているテトス(テト 1:5)にも、並行した内容の指示を与えているからである。つまりパウロが、自分の不在期間のため同労者に与えた諸々の指示は、元来の領域を超えて、その他のパウロ系統諸教会にも当てはまる、ということになる。

#### 3.3.2 Iテモテ書とIIテモテ書：有効範囲の時間的拡張

Iテモテ書が語る内容を時間的に拡張するという点では、Iテモテ書とIIテモテ書との関係が重要になってくる。IIテモテ書は、パウロがローマ(使徒 28章参照)で記した、最後の獄中書簡<sup>49)</sup>という形をはっきりと採っている<sup>50)</sup>。パウロは今や囚人としてローマにおり(1:8,17)、死が目前に迫っている(4:6-18参照)。IIテモテ書の叙述には、これが最後の「パウロ書簡」であるということを読者が、他の獄中書簡、とりわけフィリピ書との比較から間テクスト的に読み取るための仕掛けがなされている<sup>51)</sup>。

Ⅱテモテ書の状態をこのように描くことで著者は、パウロをその最期の時まで悩ませていた事柄が何であったかを読者に読み取らせようとしている。それは、真理、すなわちパウロがもたらした福音の正しい理解から迷い出た（Ⅱテモ 2:18; 4:4 参照）偽教師たちの問題だったのである。この問題は、Ⅰテモテ書とテトス書でも重要な関心事として取り上げられていた。つまり誤った教説の問題は、各書簡の具体的状況に留まらない普遍的な問題だったのであり、パウロの生前を通して、さらにはパウロ死後の状況（＝牧会書簡の時代）に至るまで、パウロ的キリスト教にとって大きな悩みの種であり続けてきたということがここには示されているのである。この問題に対して「パウロ」が与えた「正答」こそが牧会書簡の内容なのであり、それはパウロ的キリスト教全般に対して——書簡元来の状況に限定されることなく普遍的に——通用するものだというのである<sup>52)</sup>。

#### 4 結論

(1) 牧会書簡は、内容的にはむしろ教会宛書簡という類型にふさわしいものであるにもかかわらず、パウロの個人宛書簡という形をとっている。これは、古代における文献の真贋批判が、当該文書の前提する成立事情が史実に適ったものであるかどうかを検証することに重点を置いていたという事実と深く関連している。すなわち、個人的書簡のやり取りは教会宛書簡よりも執筆事情の偽装が容易である上、その手紙がこれまで知られずにいた理由も説明しやすい。それゆえに教会宛書簡ではなく、個人宛書簡という類型が選ばれたのである。

(2) 3通から成る牧会書簡は、書簡集という形態をとることによって、これら個人宛書簡が発見された事情をわかりやすくすると共に、パウロが教会宛書簡と並んで個人宛書簡をも書く習慣を持っていたということを読者に納得させようとしている。また「牧会書簡集」(Corpus Pastorale)は同時に、「パウロ書簡集」(Corpus Paulinum)の「解釈装置」として、そこに含まれ

る教会宛書簡の「正しい解釈」を示す機能をも担っている。

(3)「牧会書簡集」が3通で構成されているのは、Ⅰテモテ書の内容をテトス書が空間的に、Ⅱテモテ書が時間的に拡張することによって、手紙の中で描かれているパウロの指示が、個々の手紙が前提する状況を超えて、普遍的に妥当することを示すためである。こうして牧会書簡は、パウロ死後の教会を悩ませていた諸問題（とりわけ「誤った教え」の問題）に対してパウロが与えた「正答」としての地位を獲得しようとしたのであった。

## 注

- \* 本稿は、2009年5月18日開催の日本聖書学研究所例会において発表し、さらに第64回国際新約聖書学会(SNTS)大会(2009年8月4~7日、於:ウィーン)においてMain Paperとして発表した拙稿 *Persönliche Korrespondenz des Paulus: Zur Strategie der Pastoralbriefe als Pseudepigrapha* の日本語版であるが、聖書学研究所における例会での討議の内容を踏まえると共に、ドイツ語版では参照していなかった二次文献も加えている。他方、ドイツ語版に比べて注は大幅に削った。なおドイツ語版は *New Testament Studies* 56/2 (2010) 253-272 に掲載されている。
- 1) ここでは、牧会書簡は擬似パウロ書簡であり、3通で一体のものとして一人の著者によって書かれたという前提から出発する(P. Trummer, *Corpus Paulinum – Corpus Pastorale. Zur Ortung der Paulustradition in den Pastoralbriefen*, in: K. Kertelge [Hg.], *Paulus in den neutestamentlichen Spätschriften* [QD 89; Freiburg et al.: Herder, 1981] 122-145: 125; J. Roloff, *Der erste Brief an Timotheus* [EKK XV; Zürich: Benziger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1988] 43; A. Weiser, *Der zweite Brief an Timotheus* [EKK XVII/1; Düsseldorf/ Zürich: Benziger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 2003] 53; I. H. Marshall, *The Pastoral Epistles* [ICC; Edinburgh: T&T Clark, 1999] 86も同じ意見)。牧会書簡の全体ないし一部(とくにⅡテモテ書)をパウロ自身の手になるものと見なす試みは、説得性を欠いてはいるが、同時に、牧会書簡のフィクションが巧妙であることをも示している。この試みに対する批判は、とりわけ G. Häfner, *Das Corpus Pastorale als literarisches Konstrukt*, *ThQ* 187 (2007) 258-273: 259-265 を参照。ただし近年、とくに J. Herzer が一連の論考の中で再び3書を別々の著者に帰そうと試みている。idem, *Abschied vom Konsens? Die Pseudepigraphie der Pastoralbriefe als Herausforderung an die neutestamentliche Wissenschaft*, *ThLZ* 129 (2004) 1267-1282; idem, *Juden – Christen – Gnostiker. Zur Gegnerproblematik der Pastoralbriefe*, *BThZ* 25 (2008) 143-168; idem, *Rearranging the „House of God“. A New Perspective on the Pastoral Epistles*, in: A. Houtman et al. (eds.), *Empsychoi Logoi* (FS P. W. van der Horst) (AGJU 73; Leiden: Brill, 2008) 547-566, idem, *Fiktion oder Täuschung? Zur Diskussion über die Pseudepigraphie der Pastoralbriefe*, in: J. Frey et al. (Hg.), *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (WUNT 246; Tübingen: Mohr Siebeck, 2009) 489-536。
  - 2) フィレモン書は個人宛書簡ではない。なぜならフィレモンだけではなく、その家の教会におけるメンバーにも宛てられているからである。
  - 3) 個人に宛てた勧告内容を持つ偽作書簡の例は、T. L. Wilder, *Pseudonymity, the New Testament, and Deception. An Inquiry into Intention and Reception* (Lanham, MD: University Press of America, 2004) 82-111に見られる。ただし、真正性の疑わしいパウロ書簡は、ギリシア・ローマにおける読者を欺く意図のない勧告的内容の偽作書簡を想起させるゆえに、それらと同様、読者を欺く意図を持ってはいないという見解(111頁)は説得的でない。勧告的内容を持つ書簡は、読者を欺く意図でも草することができる。
  - 4) F. Torm, *Die Psychologie der Pseudonymität im Hinblick auf die Literatur des Urchristentums* (SLA 2; Gütersloh: Bertelsmann, 1932) 50。
  - 5) この点は、U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament* (UTB1830; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002) 383も指摘している。
  - 6) Ⅱテモテ書には、Ⅰテモテ書およびテトス書を間テクスト的に指し示す表現や言い回しが見られる——「卑俗な無駄話」(2:16// Ⅰテモ 6:20)、「真理から迷い出る」(2:18// Ⅰテモ 1:4; 6:21)、「愚かで無教養な論争」(2:23// テト 3:9)、「信仰の点では失格」(3:8// テト 1:16; またⅡテモ 2:15も参照)、「健全な教え」(4:3// Ⅰテモ 1:10; テト 1:9; 2:1; さらにⅠテモ 6:3; テト 1:13; 2:2) など。
  - 7) Trummer, *Corpus Paulinum* (注1) 133。
  - 8) A. D. Baum, *Pseudepigraphie und literarische Fälschung im frühen Christentum* (WUNT II/138; Tübingen: Mohr Siebeck, 2001) 100-112 (112「古代教会の読者は、決して異端的内容の偽名文書だけでなく、正統信仰の内容のそれをも拒絶した」〔原文イタリック〕)。それゆえ、Schnelleの批判にもかかわらず(*Einleitung* [注5], 329 Anm. 12)、M. Frenschkowski, *Pseudepigraphie und Paulusschule. Gedanken zur Verfasserschaft der Deuteropaulinen, insbesondere der Pastoralbriefe*, in: F. W. Horn (Hg.), *Das Ende des Paulus. Historische, theologische und literaturgeschichtliche Aspekte* (BZNW 106; Berlin/New York: de Gruyter, 2001), 239-272: 251の見方は正しい。Frenschkowskiによれば、「偽名文書が、意識的・計画的に遂行された欺きであり、もしそれがわかっただけで、当時の読者を概して傷つけたであろうことは変わらない」。
  - 9) W. Speyer, *Die literarische Fälschung im Altertum* (HAW I/2; München: C. H. Beck, 1971), 15-16; さらに N. Brox, *Falsche Verfasserangaben. Zur Erklärung der frühchristlichen Pseudepigraphie* (SBS 79; Stuttgart: KBW, 1975), 68-70; Frenschkowski, *Pseudepigraphie* (注8) 251。
  - 10) Speyer, *Fälschung* (注9), 112-128, 152-155, 179-218; Brox, *Verfasserangaben* (注9) 75; F. Laub, *Falsche Verfasserangaben in neutestamentlichen Schriften. Aspekte der gegenwärtigen Diskussion um die neutestamentliche Pseudepigraphie*, *TThZ* 89 (1980) 228-242: 231 Anm. 6参照。
  - 11) テルトウリアヌス『洗礼について』17.5。
  - 12) Baum, *Pseudepigraphie* (注8) 103-105参照。この長老が非難されたのは、その作

- 品（パウロ行伝）が異端的内容を含んでいたからではなく、パウロ行伝全体を創作したから、または、偽作である第三コリント書簡をパウロ行伝の一部だと称したからである。これについては Wilder, *Pseudonymity* (注3) 128-132 参照。
- 13) A. Merz, *Amore Pauli: Das Corpus Pastorale und das Ringen um die Interpretationshoheit bezüglich des paulinischen Erbes*, *ThQ* 187 (2007) 274-294: 277 mit Anm. 10 は、パウロ行伝のケースと、「パウロ書簡のいくつか(とりわけヘブライ書)について集中的になされた真正性をめぐる議論に関する報告」(a.a.O. Anm. 10) を、偽名文書が読者を欺く意図を持っていたことの証拠として引用している。しかしながら、これらの例が示しているのは、偽名文書の著者が持っていた意図ではなく、読者が持っていた、偽名文書に対する拒否の姿勢である。
- 14) コロサイ書、Ⅱテサロニケ書、牧会書簡の場合は、このことは明白である(コロ 2:16-23; Ⅱテサ 2:1-12; Ⅰテモ 1:3-4 ほか多数参照)。エフェソ書では、「誤った教え」が問題になってはいない。だが、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の間の緊張関係が問題とされており、その際著者は、ユダヤ人キリスト教的な自らの立場をパウロ自身に遡らせようとしている(エフェ 2:11-22 参照)。エフェソ書については、K. M. Fischer, *Tendenz und Absicht des Epheserbriefes* (Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1973) 83-94 を参照。Fischer によればエフェソ書は、「ユダヤ人がユダヤ人のままキリスト者であることを不可能にした決定を阻もうと」している。
- 15) M. Frenschkowski, *Erkannte Pseudepigraphie? Ein Essay über Fiktionalität, Antike und Christentum*, in: J. Frey et al. (Hg.), *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (WUNT 246; Tübingen: Mohr Siebeck, 2009) 181-232: 222 は、古代のキリスト教徒が、内容上疑義のない(正典的な)書物に対しては偽作の疑いを抱こうとしなかったと言う。しかしこのことは、偽名文書の著者が偽作の発覚を恐れなくても良かったということを意味するわけではない。偽名文書に対する批判自体は、既に述べたように存在したのである。
- 16) Baum, *Pseudepigraphie* (注8) 24-30: 「異教世界の真贋批判でも、キリスト教のそれでも、用いられた手法は広く同一であった」(23頁)。Speyer, *Fälschung* (注9) 124-126, 181-192 が真贋批判の手法として、文体、語彙、教説内容および年代的成立事情の比較を挙げているのも参照。Speyer はまた、真正性の基準として、外的証言にも触れている。
- 17) 秦剛平訳『エウセビオス 教会史』1、山本書店、1986年、当該箇所。
- 18) 牧会書簡には確かに、σταυρός, ἐλευθερία, σῶμα や υἱός のような、「パウロ的」キーワードの典型は見られない。しかし他方、パウロにとって重要な用語が用いられているのも確かである。例、δικαίος/ δικαιοσύνη/ δικαιοῦν (Ⅰテモ 1:9; 3:16; 6:11; Ⅱテモ 2:22; 3:16; 4:8; テト 1:8; 2:12; 3:5,7) および ἄγιος/ ἀγιαζῶ/ ἀγιασμός (Ⅰテモ 2:15; 4:5; 5:10; Ⅱテモ 1:9,14; 2:21; テト 3:5)。さらには、真正パウロ書簡を連想させる言い回しも見られる。例、「律法は良い」(Ⅰテモ 1:8 → ロマ 7:12,16)、「サタンに引き渡す」(Ⅰテモ 1:20 → Ⅰコリ 5:5)、「神は私たちに臆病の霊ではなく、力と愛と思慮との[霊]を与えてくれた」(Ⅱテモ 1:7 → ロマ 8:15)、「君は私たちの主に関する証し[の行為]を、また私が彼の囚人であることを恥じてはならない」(Ⅱテモ 1:8 → ロマ 1:16)、また陶器の比喩(Ⅱテモ 2:20 → Ⅱコリ 4:7; ロマ 9:21)。これらの箇所は明らかに、読者が間テクスト的連想を行うことを狙ったものである。
- 19) 「パウロの伝記」とは必ずしも使徒行伝(の後半部分)を意味するわけではない。パウロの活動については他にも伝承があったと考えられることは、パウロ行伝が証言する通りである。擬似パウロ書簡を作る著者にとって決定的に重要だったのは、その手紙が前提する成立事情が、それまで知られていたパウロに関する情報と矛盾しているという印象を読者に抱かせないことであった。
- 20) コロサイ書がフィレモン書を踏まえていることについては、A. Standhartinger, *Studien zur Entstehungsgeschichte und Intention des Kolosserbriefes* (NT.S 94; Leiden: Brill, 1999) 81-85; さらに H. Hübner, *An Philemon. An die Kolosser. An die Epheser* (HNT12; Tübingen: Mohr, 1997) 10 を参照。
- 21) オロシウス『異教徒反駁7巻』(hist. adv. pag.) VII 7.12; タキトゥス『年代記』XIV 27(ただし言及されているのはラオディキアのみ)。さらにエウセビオス『年代記』(ed. A. Schoene, vol. II, p. 154); シビュラ IV 106-108 も参照。しかし Th. Schmeller, *Schulen im Neuen Testament?* (HBS 30; Freiburg et al.: Herder, 2001) 194 Anm. 51 は異論を唱えている——「それ[地震]が本当にラオディキアと並んでコロサイにも及んだのか、そしてもしそうだとすると、コロサイが本当に長いあいだ人が住めなくなっていたのかはわからない」。さらに I. Broer, *Einleitung in das Neue Testament*, II (NEB Ergänzungsband 2/II; Würzburg: Echter, 2001) 492 は、2世紀最初の数十年間に遡る二つの碑文および、2/3世紀の貨幣が見つかったことから、コロサイの町が決定的に破壊されたのは、それより後に起こった別の地震の故とも考えられるとする。
- 22) A. Lindemann, *Die Gemeinde von ‚Kolossä*, in: idem, *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1999) 187-210: 204-5 に賛成。O. Leppä, *The Making of Colossians* (Publications of the Finnish Exegetical Society 86; Helsinki: The Finnish Exegetical Society; Göttingen: V&R, 2003) 13 によれば、コロサイ教会は、たとえ地震で助かったとしても、コロサイ書の成立当時は非常に小さかったはずで、それゆに著者は偽名文書をこの小さな(あるいはもしかすると存在しない)教会に宛てたのである。「もし手紙をエフェソ宛にしていたら、そこにはもっと多くの人々がいて、この手紙が偽物であることに気づいたことであろう」(13-14頁)。

- 23) テルトウリアヌス『マルキオン反駁』V 11.12 参照。
- 24) ローマ書とヘブライ書の後書きが示すように、筆耕は、宛名を削るよりも、そこにさらなる情報を付け加えて詳しくしていくものである。ロマ1:7,15においてἐν Πάμῃが削られているのは例外的なものに過ぎず (Gpc)、これをエフェ1:1の並行例と見なすことはできない(G. H. van Kooten, *Cosmic Christology in Paul and the Pauline School* [WUNT II/171; Tübingen: Mohr Siebeck, 2003] 197-201に反対。van Kootenは、手紙が元来はラオディキア宛だったと言う)。
- 25) U. Luz (Der Brief an die Epheser, in: J. Becker/ U. Luz, *Die Briefe an die Galater, Epheser und Kolosser* [NTD 8/1; Göttingen: V&R, <sup>18</sup>1998]105-180: 108,115) の、空所には「この回状を受け取る教会の地名がその都度挿入された」(115頁) という説明には、写本の支持がない(別の地名を入れた写本がない)。ここに「エフェソ」と挿入したのは、それが受取教会だったからではなく、エフェソがこの手紙の元来の(そして何らかの理由で落ちてしまった)目的地だと見なされたからである。
- 26) ここでは、Ⅱテサロニケ書は偽名文書であるという前提で叙述を進め、真筆性をめぐる議論には立ち入らない。この問題については例えば、W. Trilling, *Der zweite Brief an die Thessalonicher* (EKK XIV; Zürich/ Neukirchen-Vluyn: Benziger/ Neukirchener, 1980) 22-26を参照。
- 27) Ⅰテサロニケ書を指すと見るのは、例えば R. F. Collins, *Letters That Paul Did Not Write. The Epistle to the Hebrews and the Pauline Pseudepigrapha* (Good New Studies 28; Wilmington, DE: Michael Glazier, 1988) 224; E. Reinmuth, *Die Briefe an die Thessalonicher*, in: N. Walter/ E. Reinmuth/ P. Lampe, *Die Briefe an die Philipper, Thessalonicher und an Philemon* (NTD 8/2; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, <sup>18</sup>1998) 103-202: 162; Trilling, *2 Thess* (注26) 77。指していないと考えるのは、E. Best, *A Commentary on the First and Second Epistles to the Thessalonians* (BNTC; London: A&C Black, 1972) 279; Schmeller, *Schulen* (注21) 249-250ほか。
- 28) F. Blass/ A. Debrunner/ F. Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch* (GTL; Göttingen: V&R, <sup>17</sup>1990) § 425eによれば、ἡμῶνの後ろに γεγραμμένηςを補うべきだという。
- 29) Trilling, *2 Thess* (注26) 75-76。
- 30) H. Roose, "A Letter as by Us": Intentional Ambiguity in 2 Thessalonians 2.2, *JSNT* 29 (2006) 107-124に賛成。
- 31) Ⅰテサロニケ書を指し示しているとされる場合があるⅡテサ2:15の解釈については、Roose, 'Letter' (注30) 113 Anm. 17を参照。
- 32) Schnelle, *Einleitung* (注5) 380および同頁注193の研究者は教会書簡の成立をこの時期と見ている。
- 33) R. Bauckham, *Pseudo-Apostolic Letters*, *JBL* 107 (1988) 469-494: 487が、2世紀および3世紀に偽作書簡が稀になったのは、「偽作書簡に真正書簡と同じ機能を担わせることが困難を極めた」からだとしているのは正しい。
- 34) 例えば W. G. Kümmel, *Einleitung in das Neue Testament* (Heidelberg: Quelle & Meyer, <sup>21</sup>1983) 330-332; Schnelle, *Einleitung* (注5) 376を参照。
- 35) H.-M. Schenke/ K. M. Fischer, *Einleitung in die Schriften des Neuen Testaments, I: Die Briefe des Paulus und Schriften des Paulunismus* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1978) 226はそう見る。Schnelle, *Einleitung* (注5) 387および Roloff, *1 Tim* (注1) 40も、使徒行伝を著者が利用したとは「証明できない」とする。
- 36) 著者がⅠコリント書、Ⅱコリント書、ローマ書を知っていることは間違いなく、さらにフィリピ書、フィレモン書、おそらくコロサイ書も知っていると思われる。Schnelle, *Einleitung* (注5) 387および拙稿「獄中書簡としてのⅡテモテ書」『新約学研究』31号(2003年)42-55: 47-50頁を参照。
- 37) Speyer, *Fälschung* (注9) 226:「歴史的また文学的な伝承の中にある隙間は偽作者にとって、自らの作品に本物らしさを付与すると共に、自らの新しい作品の真正性に対する疑いを紛らわせるための格好の手がかりであった」。
- 38) W. Thiessen, *Christen in Ephesus* (TANZ 12; Tübingen/Basel: Francke, 1995) 251。Thiessenはさらに、「テトスの名前はこの伝道と固く結びついていたようである」(同頁)と述べる。
- 39) 教会書簡の著者がパウロ書簡集を(どのような形にせよ)知っていたことについては、上述注36を参照。すでにコロサイ書の著者が複数のパウロ書簡を手にしてきたことは、Leppä, *Making* (注22) bes. 218-223が説得的に示している。それゆえ、パウロ書簡の収集は比較的早くから始まっていたと見ることができよう。
- 40) とくに目を引くのは、Ⅱテモテ書に何らⅠテモテ書との関連づけが見出されないことである。
- 41) Trummer, *Corpus Paulinum* (注1) 133 (いずれの引用も)。
- 42) Merz, *Amore Pauli* (注13) 283に賛成。Merzによれば、偽名文書においては、自身の過去のテキストを指示するというフィクションによって、「いったん言われたことを変更するあらゆる可能性」、すなわち「一方的な強調も、さらなる先鋭化も、多義的な言い回しを明瞭化する解釈も、『誤解』の訂正も、修正から撤回まで」あるという。
- 43) Merz, *Amore Pauli* (注13) 285。
- 44) Roloff, *1 Tim* (注1) 21; N. Brox, *Die Pastoralbriefe* (RNT; Regensburg: Pustet, <sup>5</sup>1989) 17 ("vermutlich"); H. Merkel, *Die Pasoralbriefe* (NTD 9/1; Göttingen: V&R, <sup>13</sup>1991) 6.; U. Borse, *1. und 2. Timotheusbrief/ Titusbrief* (SKK.NT 13; Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1985) 22 ("anscheinend")。しかし L. Oberlinner, *Die Pastoralbriefe, erste Folge: Kommentar zum ersten Timotheusbrief* (HThK IX/2/1;

- Freiburg u.a.: Herder, 1994) 5 はこれに反対する——「パウロによってテモテのキリスト教信仰への回心が生じたというテーゼは、使徒行伝から推定することもできないし、パウロ書簡から導き出すこともできない」。
- 45) それ故にこそ、エフェソ書 1:1 には、この地名が挿入されたのに違いない。Luz, *Epheser* (注 25), 108; Broer, *Einleitung* (注 21), 512 ほか参照。
- 46) これら名前の知られていない人物と一緒に、テュキコス (使徒 20:4; コロ 4:7; エフェ 6:21-22; さらに II テモ 4:12 参照) やアポロ (使徒 18:24; 19:1; I コリ 1:12; 3:4-6,22; 4:6; 16:12) といった、名前の知られている人物も挙げられているが、これは、この名前のリストの史的信頼性を高めるためであろう。
- 47) Oberlinner, *I Tim* (注 44) XXIII.
- 48) 「彼らに思い起こさせなさい」(テト 3:1) という訓戒は、ロマ 13:1-7 への関連づけに違いないが、読者が同時に、「パウロ」がすでに I テモ 2:1-3 でこのことを語っていることをも想起する仕掛けでもある。拙稿 *Die Intertextualität von I Tim 2,1-3/Tit 3,1-2*, in: P. Lampe et al. (Hg.), *Neutestamentliche Exegese im Dialog* (FS U. Luz) (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 2008) 99-110: 108 参照。
- 49) II テモテ書の類型は、遺訓 (Testament) というより、獄中書簡である (Weiser, *2 Tim* [注 1] 35; R. F. Collins, *I & II Timothy and Titus* [New Testament Library; Louisville/ London: Westminster John Knox, 2002] 7 u.ö. に反対)。遺訓という類型にそぐわないのは特に、パウロがまだテモテとの再会を待ち望んでいるという点である (4:9,13)。
- 50) しばしば、「私の最初の弁論」(4:16) が使徒 28 章に結びつけられ、パウロは使徒行伝 28 章の出来事の後に行った釈放され、その後再びローマで投獄されるに至ったのであり、それが II テモテ書の執筆状況だという仮説が提示されている。しかしこの説は、Brox, *Past* (注 44) 28-31.275 および Weiser, *2 Tim* (注 1) 57-58, 323 によって既に正しく批判されている。
- 51) 拙稿「獄中書簡としての II テモテ書」(注 36) 47-49 参照。
- 52) 「牧会書簡集」を束ねているのが論敵という主題であることは、Häfner, *Das Corpus Pastorale* (注 1) 263 und 267 も指摘している。